

# 「橋渡し」のための専門性

—暗黙知の蓄積と実践



江口佳子

東京外国語大学 非常勤講師

## はじめに

会議通訳、外交通訳、通訳ガイド、コミュニティ通訳等、「通訳」という名の職に共通する役割は言語面の仲介である。話者の言葉の意味を正しく理解し、それを明確に聴き手に伝えるために、通訳者には高度な語学力と運用力が求められる。

それでは通訳という職種の中でも、コミュニティ通訳に特徴的な役割は何であろうか。現在、コミュニティ通訳の活動の場は行政、司法、医療、教育、労働等多岐に亘っている。杉澤はコミュニティ通訳とは「言語・文化的マイノリティを通訳・翻訳面で支援することによってホスト社会につなげる橋渡し役」とであると述べている [杉澤 2011:203]。また、水野はコミュニティ通訳について「異なる個々の文化に対処し、コミュニケーションを円滑にするための知識と能力が必要」 [水野 2008:15]、あるいは「異文化間の橋渡し」 [水野 2008:27] であると述べている。言語的側面の他に両者に共通するキーワードは「文化」と「橋渡し」である。

そこで本論考では、コミュニティ通訳を、外国人相談者から直接相談を受ける相談員ではなく、相談者と専門家をつなぐ通訳の立場に限定し、文化の橋渡しを担うことの専門性について述べることにしたい。

## 1 事例から

ここでは、筆者がコミュニティ通訳として紹介された事例について、その実践内容と反省点を述べたい。

### (1) 小学校での保護者面談

特別学級に通う小学生の児童の保護者（母親）と担任、学年主任との三者で行われた面談である。ブラジル人の保護者は、日系三世の夫とともに娘を連れて来日した。面談は30分を予定していた。保護者の到着まで時間があつたので、学年主任にコミュニティ通訳を含めた面接の有為と、学校の保護者面談の頻度について話を聞いた。学校で通訳を介した面接は以前行われたものの、ほとんど経験はない。保護者面談は、1学期末と3学期末の年2回行われるとのことであった。

保護者が到着し、児童の教室で面談が始まった。担任教師からは、1学期中の授業やその他の時間（給食や休み時間等）の様子、通知表の説明があつた。保護者は、担任の話聞き、子供が頑張っていることを知って喜んでた。また、「普段は親の帰宅時間が遅いため、祖母が学校の送迎バスで子供の帰宅を迎えているが、帰宅後よく笑っているようなので、学校が楽しいのだと思う」とも述べた。面談は15分ほどで終わり、学校側も保護者も特にそれ以上続ける様子はなかった。

保護者面談が年2回であることや、平日に保護者と児童が接する時間が短いことを知り、筆者は学年主任から、保護者へ質問することの了解を得た。平日に子供と学校について話す時間を尋ねると、保護者は夫婦とも工場で働き、平日は交替勤務であるため、帰宅時間は深夜になることが多く、子供との会話は朝だけしかないとのことであった。さらに、筆者から、次の面談は3学期末であるから、せっかくの面談の機会でもあるし、他にも質問をするよう勧めた。保護者自身で質問が思いつかないようだったので、例えば、夏休みの過ごし方や新学期最初の持ち物、2学期に保護者が参加する行事に関する質問を助言した。保護者がそれらを尋ねてほしいと言ったので、担任教師と追加の質疑応答を行い、面談は終了した。

### (2) 「橋渡し」という行為について

筆者はこの事例において、面談に時間的な余裕もあり、保護者の出身国の文化・制度の違いを考え、日本の学校についてもっと知る機会になればと、保護者へ例を挙げて、学校への質問を促した。保護者にしてみれば、学校についてより多くの情報を得ることができたわけであるし、学校側としても、普段は接することの

少ない保護者へ多くの情報を提供できたわけであるから、双方にとって有益であったと言える。また、筆者にしても、面談当事者の教師と保護者の言語の壁を解消できたため、「橋渡し」という役割を果たせたと考えられる。

しかしながら、筆者は教育の専門家ではないのであり、自ら考えた質問事項で保護者に質問を促すのではなく、学校側へ、保護者からの質問を引き出したり、アドバイスをしよう働きかけるべきであった。この点、「橋渡し」の仕方を誤ったと言える。

## 2 コミュニティ通訳の専門性

通訳の場において有益な橋渡しを実現するためには、準備の段階から通訳終了後までの一連の流れを押さえ、各段階において為すべき点を事前に整理しておく必要がある。

### (1) 通訳の現場に入るまでの準備—“知”の形成

通訳の現場において、話者が伝えたいことを理解し、正しく訳出するためには、語学の基礎学力はもちろんのこと、その国の文化や歴史を学ぶとともに、自国の公的制度を含む一般常識から各分野の専門知識、社会事象に至るまで、幅広い知識や情報に習熟しておくことが求められる。また、知識や情報とともに大切なことは、それまでに培われた通訳の経験である。これら知識、情報、経験を総合してコミュニティ通訳は暗黙知と呼ばれる“知”を形成するが、通訳の現場でそれを瞬時に取り出して応用するための訓練が必要がある。

### (2) 「橋渡し」の現場の体系化

通訳の現場で必要となるのは蓄積された暗黙知を有効に活用し、相談者と専門家を橋渡しするための現場の体系化である。そのためには、通訳だけでなく、専門家による協力も欠かせないであろう。

筆者は都内の外国人支援ネットワークや弁護士会等が主催する外国人相談会にコミュニティ通訳として参加してきた。これまで参加した相談会では、ほとんどの場合、相談会の前に事前ミーティングがあり、相談会の終了後にはフィードバック・ミーティングが行われた。筆者はこれら2つのミーティングを当日のロジスティックな段取りの一部に過ぎないと考えてきた。しかし、現在は相談会前後のミーティングの重要性を認識している。

事前ミーティングでは、専門家と通訳の間で通訳中のコミュニケーションの取

り方についてあらかじめ決めておくことが重要である。例えば、相談者と専門家の間でコミュニケーションが難しい状況が発生し、通訳者の知識や情報が必要であると判断した場合には、通訳者が手を挙げるなどの合図をして中断することを、専門家との間で了解事項にしておく。また、相談会後のフィードバック・ミーティングでは、通訳者と専門家は相談案件を紹介するにとどめるのではなく、通訳時にコミュニケーションが困難となった点を共有することが有益である。通訳と専門家の両者の視点からフィードバックすることで、通訳の現場での課題を学ぶことができるし、次回の相談会への教訓・備えとすることができるであろう。

以上のように、通訳の現場に至るまでの“知”の形成や現場での体系化は、まとまった相談会だけでなく、事例のような個別面談の場合においても当てはめることができよう。面談前に、学校側と面談時のコミュニケーションの取り方を確認しておく、また、面談者について必要な基本情報を得ておく。そして、暗黙知と照らし合わせる。また、面談終了後には学校側とフィードバックを行い、反省点などを共有する。このようにして、次回の通訳の場に向けた暗黙知を蓄積していくことが必要である。

### (3) 社会的背景の把握

さて、最後に、この事例における暗黙知を社会的な視点から考察したい。それは、事例の保護者面談を個々人の問題ではなく、社会的な事象として一般化して把握するということである。

外国人が集中して住む集住地域では、問題が同時期に同一の問題として顕在化する場合が多い。しかしながら、外国人が分散して居住する地域では、これらの問題は可視化・認知されにくい。このような場合、社会的背景を把握しておかなければ、通訳の場で適切な橋渡しをすることができないかもしれない。

日本社会は1980年代以降、労働力の確保という経済的必要性から、外国人労働者を受け入れてきた。そして、1990年に制定された入管法により、日系二世、三世に対して「定住者」という法的な優遇措置がとられた。在留資格に就労上の制限がないことから、来日する日系人が急増し、その多くは業務請負業者を介して契約を結び、製造業分野の工場へ派遣された。また、時間給での就労のため長時間労働であることが多かった<sup>1</sup>。この就業形態による生活スタイルが、日系人の親子のコミュニケーション不足を生じさせることとなった。

事例の保護者もそうした日系人の家庭である。夫婦ともに帰宅が深夜におよぶ工場に勤務し、親子のコミュニケーションは一日のうちの限られた時間であった。

このため、保護者が学校現場への関心を持つことすら困難であったに違いない。(学校について)「何がわからないのか」さえわからない様子であった。一方、学校側も特別学級における外国人児童の受け入れの経験が乏しかったことから、保護者への配慮が特に必要とされる例として認識していなかったのかもしれない。このような通訳の現場では、コミュニティ通訳が社会的背景を把握しておくことで、当該外国人をホスト社会へ橋渡しする支援ができる。逆に、それを把握していなければ、適切な橋渡しをすることができない場合もある。

## おわりに

本論考では、通訳が現場で、適切な橋渡しをするために備えるべき専門性の観点から、暗黙知の蓄積、現場の体系化、社会的背景の把握の必要性について述べた。コミュニティ通訳は、一般に、社会的弱者の外国人を対象にする機会が多い。そこでは、彼らが自立した生活者として日本社会に参画するための「橋渡し」役として寄与することができる。

近年、看護師などの専門分野で外国人の受け入れが認められ、外国人の就労分野も多様化し、その出身国や家族構成も変容している。グローバル化した現代社会の変化は速く、私たちを取り巻く文化も「時間的空間的連続性のなかで変容し続ける動的」[山西 2010:66]なものである。多層化する社会において、文化的側面から支援は益々重要性を帯びており、コミュニティ通訳の役割が期待されている。



コミュニティ通訳の場は遠隔通訳にも広がっている

---

### [注]

<sup>1</sup> 日本政府が労働者として日系人を受け入れた経緯について、梶田[2009]を参照した。

### [文献]

- 梶田孝道, 2009, 「現代日本の外国人労働者政策・再考」志水宏吉編著『日本の教育と社会 第17巻 エスニシティと教育』日本図書センター
- 杉澤経子, 2011, 「多言語・多文化社会における専門人材の養成」近藤敦編著『多文化共生政策へのアプローチ』明石書店
- 水野真木子, 2008, 『コミュニティー通訳入門』大阪教育図書
- 山西優二, 2010, 「多文化社会にみる教育課題」『シリーズ多言語・多文化協働実践研究別冊3 多文化コーディネーター 専門性と社会的役割』東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター